

エコたま グリーン NEWS



多摩市民環境会議機関紙 第139号(通巻第199号)
2014年12月4日発行 発行人:清水武志朗 編集人:井上ひさかず 〒206-0025 多摩市永山3-9 東永山複合施設301 (事務局員は常駐していません)
e-mail qqh43tdd@train.ocn.ne.jp
URL www.ecomeetingfama.jp

紅葉と宇宙桜を愛でるミニツアー



もみじ平でイロハモミジを見る一行

多摩市内でサクラをこよなく愛する人たちの団体「多摩桜人(さくらびと)の会」が催す「秋の紅葉狩り」が11月30日に都立桜ヶ丘公園で開かれ、約30人が参加。公園内の自然を愛でるとともに、昨年3月3日に植樹された4種の宇宙(そら)桜をめぐって鑑賞する小ツアーを行った。

この会の発足は、多摩商工会議所の主導する「多摩桜プロジェクト」がきっかけ。同プロジェクトでは、2008年にスペースシャトル・エンデバーで若田宇宙飛行士が宇宙に運んだ全国14カ所の名物サクラの種子が宇宙滞在259日、地球を4100周したのちに若田さんとともに地球に帰還し、全国の出身地に戻された。

同会議所では、宇宙から還ったサクラの種がふたたび芽吹くことで、いのちの美しさを学んだり、多摩の



とんぼ池の近くに植えられた滝桜

歴史的景観であるヤマザクラの保存と復権プロジェクトを進める。そして宇宙桜を各地から分けてもらい記念植樹することで、全国の桜自慢都市との連携を図ることなどを「多摩桜プロジェクト」の中核事業と位置づけている。

さて、そうしたプロジェクトに賛同した桜人の会は、30日の午前10時に旧聖蹟記念館前に集合すると、さっそく桜ヶ丘公園のレンジャーである内山幸俊さんの案内でミニツアーに出発。

すぐ近くの丘の上広場では、最初にヤマザクラとソメイヨシノの違いについての説明があった。同公園内にはソメイヨシノが約180本、ヤマザクラが300本以上あるが、ざっとくくって園内を散策するコース周辺



ゆうひの丘には醍醐桜が植わる

ではソメイヨシノ、それ以外のコースから離れた林内にヤマザクラが多いという。

違いはソメイヨシノが花が咲き終わったあとに葉が出るのに対し、ヤマザクラ

は花と葉が同時に出ること。よく見るとソメイヨシノは花の下に毛が出ている。

さらにざっくりだが、両手を横に広げた格好の枝の木がソメイヨシノ、両手を上に



山の越にある2本の稚木の桜上げた格好の木がヤマザクラなどの説明もあった。

ちょうの道を下って旧農業者大学校跡地のとんぼ池に。ここには宇宙桜の「三春の滝桜」(福島県)の子木が植えられている。また、この池にはシオカラトンボ、オオシオカラトンボ、ショウジョウトンボなどの発生源となっており、近くの森林総合研究所の敷地内からはアカハライモリなども出てくるという。

つぎに、近年ロケ地としても知られる「ゆうひの丘」に。ここは昨年、植樹式の式典を行ったところだが、その跡地に岡山県真庭市から分けてもらった「醍醐桜」が植えられている。ゆうひの丘の東側には孟宗竹の林があるが、ここはボランティアたちが間伐を行っており、美しい竹林の風景に変えている最中とのこと。

また、竹林の手前はオオキツネノカミソリやシナマンサクの咲くところだが、冬のいまは母体の草がちょっと顔をのぞかせているだけで、踏まれても構わない。内山さんは「成長



ナバンギセルを説明する内山さんする季節になったら柵で囲いますから大丈夫です」。

記念館入り口近くから「山の越」におけると、ここには高知県佐川町から分けてもらった「稚木(わかき)の桜」が2本植わっている。平成21年7月に宇宙から帰還後、5本が発芽し、平成23年1月には同地で135cmまで成長。同23年3月に当市に譲られたあと、24年4月には早くも開花したという。成長しても160~170cmくらいまでしか伸びないのでこの名が?

4種目の最後は、お花見坂の上部に位置するひぐらし坂の頂上にある「ひょうたん桜」。高知県仁淀川町から寄贈された。樹種はエドヒガンで、つぼみがひょうたんの形に似ていることからこの名がついた。

こうして、桜ヶ丘公園の貴重な自然と宇宙桜をたっぷり堪能した桜人の会員たちは、最後にお花見広場で日本エッセイストクラブ会員の今野耕作さんから「多摩の古代はこんなに素晴らしい」と題するミニ講演を聞く。ここでは、古代の多摩地方が大和朝廷の直轄地だったことや、市内にある天皇廟と同じ八角形の稲荷塚古墳は、その朝廷から派遣されたグループのリーダーの墓と推定されることなどが話された。

最後に、日本書紀や万葉集などのなかから、桜に関する和歌が数首紹介され、もうすべてが“桜づくし”。

さらに商工会議所の女性会員たちが手づくりしたおにぎりとなめこ汁の昼食 最後に今野さんのレクチャーを聞くをいただいたあと、解散。精神的にも肉体的(?)にもおなががいっぱいになった1日だった。



災害からわが生命を守ろう！

立川防災館見学・体験記



東京消防庁の立川防災館は、以前から行ってみたいところだったが、これまでは建物の前をクルマで通るだけで入ったことはなし。だが11月16日に、聖ヶ丘

2団地の管理組合が合同で催行 1丁目住宅自治会とエステート聖ヶ丘3丁目管理組合の合同見学会があったので、その「無料バスツアー」に同行させてもらうことになった。

この「無料バス」。こういった団体で市に申請すれば、年に1回、「借り上げ」という形で市の負担で手配してくれるのだそう。今回の2地区からの参加者は計26名。

午前9時15分から最初のプログラムが始まるので、9時には現地に着いていなければならない。今回は聖ヶ丘1丁目に午前8時集合だったが、5分ほど遅れて出発したにもかかわらず、日曜日の早朝で道路が混んでいず、8時40分ごろにはもう防災館に着いてしまった。

先に八王子市の団体がやはりバスで訪れていた。彼らは防災館の入り口で館が開くのを待っていたが、われわれは寒いのでバスのなかで待機。そのうち、9時10分前ごろに入り口が開き、われわれも館内に。

各団体は事前申し込みをしているので、必ず1人の「インストラクター」と呼ぶ消防や救急を勤め上げたOBなどのガイドがつく。まず案内されたのが防災ミニシアター。階段状の狭い部屋だが、そこで3.11東日本大震災のドキュメント映像を見せられ、「われわれは防災について、この体験から学んでいかねばならない」と告げられる。

基本の心構えを知ったあとは、2階に上がり心臓マッサージとAEDの使い方を学ぶ。2人ひと組になり、ひとりが心臓マッサージをしている間にもうひとりがAEDを取りにいった、器具を開いて置くと、心臓マッサージをしていた人が人形の右胸と左わき腹にパットをあて、電気ショックのスイッチを押す。これを交代で行うわけだ。

だが、心臓マッサージは1分に100回がめど。しかも力を込めてやらねばならない。少し疲れたかなと思ったらインストラクターが「まだ15秒しかたっていませんよ」。この作業のポイントは、救急車が来るまで「強く、早く、絶え間なく」行うこと。5秒もマッサージをあげたら、事故者の蘇生率は急速に低下していくからだ。

つぎに訪れたのが隣にある消火訓練室。ここでは4～5人ずつが消火器を使って壁に映る火事現場に向けて放水する。燃え上がる石油ストーブの映像に向けて放水するのだが、水が「ドー、ドー」と壁に当たる大きな音で見ていた小学生の女の子たちが「キャー」と悲鳴を上げた。

適当な時間になると「消火



完了」の字幕が出て終わり。

煙体験室は、暗く煙がただよう中で、部屋を数部屋まわって出口まで到達するというサバイバル体験。煙のすすは肺に入って窒息の



案内者が煙体験室を紹介原因になるし、一酸化炭素中毒は体内に酸素を運ぶ働きを止めてしまうので、致死率を高める。だから火災時は姿勢を低くしてハンカチなどを口や鼻にあてて、有害な煙を吸わないようにして避難しなければならない。

体験室のなかには火災の映像と消防車のサイレンの音などがし、臨場感は最高。しかも有毒ではないものの、煙に包まれるのだから、前の人について必死に姿勢をかがめて進むだけ。まちがわずに出口についたときはホッとした。むろん、写真などを撮っている余裕なんかない。

また、ここでは非常時の「誘導灯」は、停電になっても20分程度は非常電源で点灯していることを知らされる。

最後は「地震体験室」。震度6程度の横向きや上下動を発生させ、体験者は机の下に身をかがめ、机の太い足にしがみついて揺れが収まるのを待つ。このときつかまっていた足が動いてしまい、どこかに落ちてしまうのではないかと心臓がキューッと縮まった。

というようなわけで、けっこうリアルな体験ができる防災館は、一度体験しておく、いざという時の冷静な対応につながるかもしれない。必ずやってくると予想される首都圏直下型地震などに備えて、あなたもどうですか？（I）



●立川防災館 ☎042-521-1119 地震体験室を外から見る子

産業界と再生可能エネルギー

多摩循環型エネルギー協会の主催する「みんなで考えよう！ 私たちの街の再生可能エネルギー」シリーズの第2回は、11月25日にパルテノン多摩で開かれ、5人の円卓会議メンバーと、産業界から2人のゲストが招かれ、それぞれの立場での事例紹介を行った。

ひとりには日本電気株式会社スマートエネルギー販売推進部の岩本匡史部長、あとひとりにはGEヘルスケア・ジャパンの内田誠二さん。（→岩本さん）



岩本さんはHEMS（ホームエネルギー管理システム）の導入により、「電気の見える化」と情報技術（IT）を組み合わせることで、エネルギーコストの低減化を図るとともに、じつは防災にも役立っているという話を行った。（→内田さん）



内田さんは日野市のJR豊田駅近くにある本社に、多摩電力への屋根貸しで58kWの太陽光発電設備を設置した結果、社内の関心がとても強く、「うちでも太陽光をやっているよ」ということを外部に向けてアピールしようというアイデアがどんどん出てきて、社内の話題づくりに役立っている。翌週から発電が始まるということで、社員もワクワクしている。そして20年後には多摩電力より機器一式が無償譲渡されるということにも期待を寄せていた。

円卓会議の様子

